

卒業文集の巻頭にふさわしい詩を選ぶ

作品の魅力を伝える

使用教材：「春に」「わたしを束ねないで」（三年）

「雑草」「第一ページ」（『光村ライブラリー 中学校編 第五巻』）

東京都千代田区立麹町中学校非常勤講師

西塔麻美子

1 指導計画（全二時間）

■目標

「目的に応じた詩を選び、その魅力を伝える」ことを通し、次の二つの力を養うことをねらった。

○詩の世界を豊かに想像し、味わう。

○自分の考えを言語化して明確にする。

■展開

第一時

・四編の詩を読み、作品中の抽象的な表現や感情を表す言葉に着目して、詩の世界を想像する。その際、それぞれの詩から受けた印象なども併せてまとめておく。

・卒業文集の編集委員になったと仮定し、どのような文集にしたいかを考える。

【例】「中学校生活の思い出となるような文集」「未来への希望が感じられる文集」「卒業前の今の気持ちが表れている文集」など

第二時

・前時の内容を踏まえて、四編の中から卒業文集の巻頭を飾るのにふさわしい詩を選ぶ。その理由や作品の魅力をワークシート等にまとめる。

・グループで意見交流を行い、その後、クラス全体で意見を共有する。

・最終的に自分はこの詩を掲載したいと考えたのかをまとめ、学習を振り返る。

2 指導の工夫・学習の実際

生徒が作品を主体的に読むことができるように、次の三点を工夫した。

- ①複数の詩を比べ読みさせる。
 - ②「自分が文集編集委員になったとしたら」という状況を設定して学習活動を行う。
 - ③意見交流後に個人で再考させることで、自分の考えを再構築できるよう促す。
- ①・②は、生徒が詩を読み深めるうえで

こころのアンソロジー

「こんなときに読みたい詩集」を作る

使用教材：「わたしを束ねないで」（三年）

1 指導計画（全七時間）

■目標

○複数の詩を読み、そこに表れた作者のものの見方・考え方を比べる。

○意図をもって、詩集を編集する。

○目的や意図に応じた表現を用いて、前書きや後書きを書く。

■展開

第一次（二時間）

詩「わたしを束ねないで」を「どんなとき」に読みたいか、理由とともに発表し合う。

第二次（三時間）

「こんなときに読みたい詩集」を編集し、前書きと後書きを付ける。

第三次（二時間）

作った詩集を読み合う。

2 指導の工夫・学習の実際

第一次で発表し合う「どんなとき」は、

筑波大学附属中学校教諭 細川李花

「春の日の夜明けを見るとき」「眠る前の静かなひととき」という特定の時間を指すものや、「新しいことに挑戦するとき」のように人生における段階を示すものなど、自由なレベルの「とき」でよいことを全体で確認した。理由を必ず発表することで、詩の主題をどう捉えたかが明らかになり、多様な読みを共有することができた。

第二次ではまず、教師が作った詩集をモデルとして提示し、活動のイメージをもたせる。次に、第一次の発表をもとに、これまでに自分が詩を必要としたときを想起し、詩集の軸となる「とき」を考えさせた。「テストの結果が悪かったとき」「引退試合で負けたとき」「元日の朝」「恋に敗れたとき」など、さまざまな場面が挙げられた。

詩集に採録する詩は、個々に収集させる。教師は司書教諭と協力し、学校図書館と地域図書館から借りた詩集を用意した。生徒はこれらや、自宅にあるものをもとにそれ

有効な手立てであり、③は、生徒が十分に思考できる時間を確保することが、深い学びにつながる考えた。

主教材「わたしを束ねないで」は、クラス全体で読みを深めた。「春に」は既習教材なので、内容を簡単に復習することにとどめた。「雑草」（北川冬彦・「第一ページ」）（丸山薫）は生徒に読みを任せ、鑑賞した内容をワークシートに記入させた。それらのワークシートやノートを、読み比べや意見交流での発言に生かす生徒も多かった。「巻頭ではなく、巻末に載せたほうがよいのではないか」という意見が出るなど、思考の深まりが見られる場面もあった。意見交流後には、どのような卒業文集にしたいかによって選ぶ作品が異なることに、クラスの大半の生徒が気づいていた。

3 考察

詩は読者の想像力を喚起させるが、その自由度の高さゆえに、生徒に鑑賞を委ねた授業に終始してしまうことが多い。目的に応じて、複数の詩の中から一つを選ぶという今回の課題は、生徒の目に新鮮に映ったようである。この活動を通し、生徒は詩を評価的に読むことができ、結果的に作品を読み深めることにつながった。

ぞれ三〜六編の詩を選択する。そしてそれを清書し、表紙と題を付け、三百字程度の前書きと後書きを書く。写真や絵を添えるなど、各自思い思いの詩集を完成させた。

第三次では、互いの詩集を読み合う。詩集の最終ページはコメントを書き合うスペースとし、感想や評価を書いた。

3 考察

詩の学習というと表現技法とその効果、主題等の分析的な読解に重点を置きがちだが、生徒は三年間の学びを通して、こうした読みの力がある程度身につけ、詩に表れるものの見方・考え方を、自分なりに捉えることができるようになっていく。卒業期の単元として、表現技法や主題にはあえて触れず、解釈を個々に委ね、もっと自由に詩を読み味わう授業を設定したいと考えた。

学校生活や進路選択で悩みやすいこの時期に、好きな歌詞や偉人の名言などから勇気をもらったり、慰められたりする生徒の姿を多く目にする。吟味された言葉の結晶である詩も、同様の力をもつだろう。詩は、生活の中でも、生徒を励まし、支える存在となる。生徒が今後の人生においてもさまざまな場面で豊かな詩と出会い、詩からの贈り物を受け取ることを期待したい。